

一、まるで嘘のように

自分は今、いったい何をしているんだろう？　なんて、何かに夢中になりながら、ふと立ち止まるような気分になることが子供の頃から度々あった。それは大人になった今でも変わらない。別に僕だけがそうなのではなくて、誰にとっても普通にあることなのかもしれない。よく分からない。

たとえば今、空調の効いたただ広い個室にどんと置かれた広いベッドの上で僕は彼女と睦み合っている。というか、睦み合おうっていうのは、こういうことをいうものか、などと他所事のように僕は考えている。生温かい肌に唇を這わせてみる。甘い肉の味がする。こういうときに、なぜか先日、ネットで見かけた男の娘の画像が頭をよぎる。可愛かったな、なんて。

だけど、いくら可愛くても、彼(?)の体はこんなに柔らかくないだろうと、彼女の胸から下腹部へと手を伸ばしながら思う。ふだんは全然気にならない、自分の指の節々や、腕の筋肉がごつごつした感じを意識する。

それにしても、二時間三千九百円の自由、どこからも横槍の入らない部屋はまた、なんて俗っぽい空間なんだろうと思う。

「もっとめちやくちやにして」なんて、本気なのかどうなのか彼女がかすれた声で言う。

「理沙のえっち」と言い返してみる。

彼女が少し媚びたような目つきでこちらを睨みつけ、軽く顎を突き出す。

「いいじゃん、べつに」

僕は彼女の唇を自分の唇でふさぐ。

柔らかいうめきが唇を通して伝わってくる。まっさらな、だけど無数の男女の体液が染み込んだであろうシート。可もなく不可もないソファと小テーブル。適度に薄暗い照明が壁紙に影を投げかけている。その白々とした陰影には秘密めかしたものは何もない。何か得体の知れない生き物が息を潜めているなん

てことは、絶対にない。
なんだろう、この空気。なんて、我を忘れかけながら僕は思う。さんざめく波にたゆたいながら、じつとその揺らぎを観察する。小さな光が目まぐるしく生まれては消える。いつものように理沙の眉根が八の字に歪み、泣きそうな顔になる。抱きしめると強く反発してくる。逃がさないように、僕は全身に力を込める、そしてもう少し急ぎ始める。

二、稀によくある

出先から急に店に呼び返されると、ふだんは見かけない地区の統括マネージャーが僕を待ち受けていて、いきなり事務所での面談となった。

何事かといぶかる僕に、まだ若い二十代のマネージャーは告げる。

「三重店ってあるだろ？」

「はい。行ったことはないですけど、三重って、たしか大分でしたっけ。それでいつから行けばいいですか」

「ああ、それは向こうの店長と相談して決めてくれ」

隣の県の店舗への転勤話に、僕はあっさりと頷いた。

求められている役割は今と変わらない。店舗の販売員兼事務員、兼雑用係。多少違ったとしても、就職して三年目ともなると自分個人のことなんて後回しになる。というか、それでは何が先かというところまた何も無い。

ともあれ向こうの様子を尋ねてみた。人が足りずに忙しいらしい。いや、それはこっちも同じなんですけど、というせりふを僕は飲み込んだ。まあ、どこも同じではあるか。それと、「なんでこの時期なんですか？」くらいのことは訊いてみた。

マネージャーが、Tって知ってるか？ と僕に問う。

「ああ、自分の一年後輩ですね。名前くらいは知ってます。電話で話したこともあったかな」

で、その彼が転勤するかしらないかでごたごたしたあげく、結局辞めてしまっ

たということらしかった。なるほど、よくあることではある。決定まで長引いたのは壁に瑕だが、年度替わりの時期なら、それほど周りにも迷惑はかからないし。

「それで、自分はその代わりですか？」

「まあ、そんなようなものだ」と、マネージャーが言葉を濁す。曖昧に頷いた僕に、マネージャーは続ける。「いや、じつを言うと、Tの代わりに行ってもらうつもりだったWさんも辞めてしまってた」

その三十代前半の先輩社員のことにはよく知っている。僕が入社して初めての店舗で三ヶ月ほど一緒だった。まあたしかに、普段から会社への不満をよく口にしていた。

昔、大学時代のアルバイト先で耳にした誰かのせりふを思い出す。

文句ばかり言ってる人の方が意外に辞めないから。辞める人は、黙ってきれいに辞めてくよ。

でもそれも物事の一面にしか過ぎない、なんて僕はこの二年あまりの間に学んでいた。そんなこと、どっちでもいいし。どちらも、よくあるわけだし。五月半ばという中途半端な時期の異動も珍しくはないし。

玉突き人事なんて言葉もあるし。ああそうか、なるほど。

ブラインドの隙間から、明るい五月の日差しが差し込んでいて、事務机に段々のくっきりした影を落としている。

すぐに汗にまみれる季節がやってくる。

去年も一昨年も、たぎるような熱気とアスファルトの焼ける匂いの中を僕は淡々と歩き回った。

三、嘘ではないけど

これで七回目。いや、八回目かも。

全裸のまま、模造革のソファにべったりと腰掛けて、やはり素っ裸のままの彼女の肩を抱きながらそんなことを考えた。互いの生汗の乾きかけた肌の感触

がへんに心地いい。

ベッドの中で二人して、あれをしたり、これをしたりしてるよりも、もしかするとこんなシチュエーションの方が、僕は好きなのかもしれない。

ちよっと年寄りくさいか。

それで、うん、二ヶ月で七、八回くらいっていうのはどうなんだろう。会うたびになんて。

「ねえ、私のどこが好き？」不意に彼女が訊いてくる。ああ、いつもの遊びが始まったなんて思いつつ、今回は、「まつげが長いところ」と覚えてみる。

「それから？」

「それから、えっと、」僕は、たとえば彼女の脇腹か乳首か、その辺りをくすぐって、彼女が声を出したら、反応がクリアなところ、なんて言おうと思っただけで、とりあえず逃げ口上。

「次までに考えとくから」

「なによ、それ」彼女がふくみ笑いをする。

なによ、と言われても困る。いや、別に困ることなんてないか。もう、何度も訊かれたし、いろんなパターンで何度も応えた。

「なんか話してよ」と、今度は僕が言う。

「何を？」

「なんでもいいからさ。理沙の好きなことでも、昔の話でも」

「それじゃ、えっとね。……昔々あるところに、修吾君っていう男の子がいました」

いや、そうくるとは思わなかったけど。

「修吾くんは、女の子を引っかけて遊びました」

なんだ、そりゃ。

「それから、修吾くんは、次々に女の子に手を出して遊び続けました」

「それで？」

「おしまい」

「なんか投げやりすぎるよ、それ」いや、突っ込むところはそこではないのは分かってるけど。ほんと、言葉ってなんだろうね。

僕はソファに座ったまま右手を彼女の背中に回す。左手を彼女の両膝の下に

入れて抱え上げて、いわゆるお姫様だっこというやつを試してみる。そのまま彼女を膝に乗せて目をつむる。暖かくも寒くもない清潔な部屋で、僕は彼女とひとつの卵のように呼吸を合わせる。

学生時代の友人から紹介されて一度目は普通にドライブデートを試してみた。二度目はテーマパークに行つて、その帰りに、月並みだけど海に寄つて、キスをした。僕が唇を寄せると彼女は最初のうち顔をそむけて、だけど追いかけると応じてくれた。

息を荒げて、それまでとはまるで違う生き物になった。

三度目に会つたとき最初のセックスをした。僕は彼女に「好きだ」とか「付き合つて欲しい」とか、一言も言つてない。

四、これもよくある

レースのカーテンを買おうと思った。今まで、就職をしてから一人暮らしを始めて二年と二ヶ月、とりあえずといった感じで遮光カーテンだけで済ませていたけど、これからは、もっとちゃんとしようと思った。

洗濯機と冷蔵庫も、僕は持つてない。ああ、そっか、炊飯器も。

洗濯物が溜まると二十四時間のコインランドリーに持ち込めばいいし、食事は外食とコンビニで用が足りる。だけど、いつまでもそんなじゃいけないような気がする。もちろん、会社は何もそんなことは求めていない。

仕事をして給料を受け取る。

だけど、それは本当だろうか。生活を差し出して給料を受け取る、の方が正しいような気もする。僕の送別会のカラオケで、ユニコーンの「大迷惑」を歌いながら、そんなことを考えた。

選曲は、ただたんにそれらしく、別に迷惑とかそんなことを感じてるわけじゃないくて役割を演じてみただけで。

「そういえば、この歌詞の、係長つて何ですかね？」歌い終わってから、僕は誰ともなしに尋ねてみた。「見たことないですけど」

「職制だから、昔の」

一年と二ヶ月の間、一緒に仕事をした五十歳代の支店長が言う。この年齢で店長というは、社内ではちょっと珍しい。ふつうは、三十歳くらいまでに店長になって、それから一部の人はもつと上に行つて、他の大半の人は現場の一線を外れて店舗か、地区のラインスタッフに留まる。

一年ごとに契約を更新する、契約社員に切り替わる人も多い。

ちなみに、もつともつと上の人たちは、よその上場企業から来ている人が多い。銀行とか。だけど、その辺りのことは僕には直接関わりがない。

「職制、ですか」

「まあ、昔はな。年功序列で係長から、課長、部長つて上がっていったものだけ」

「はい」いや、そのくらいのことは知ってるけど、改めて、そんな話も聞いてみようと思った。

「それでポストが足りないときは、課長補佐とか、副部長とか作つて埋めてたわけ」

ふむふむ、なんでもつともらしく領いてみる。

領きながらソフトドリンクのストローを口につける。この、明るいオレンジのドリンクの色がもし見えないなら、味も違って感じるのかもしれない。

「助役とか主任とか、いたこともあったな。……ところでお前、今年は二グレードに上がれよ」

「はい」この会社の正社員はグレード制になっていて、その数が多いほど給料も上ということになる。

「やめて、愛してないなら」販売の主婦パートさんの、エコーのかかった歌声が耳に飛び込んでくる。

「必要な資格は全部取ってるんだろ」

「あ、えっと、マネジメントのベーシックだけ残しています。販売資格とかコンプライアンスとかは取ってますけど」

「やめて、くちづけするのは」

「そうか。お前たちの世代も大変だとは思うけど、今のうちだからな」

「はい」

「やめて、このまま帰して」
ずいぶん濃い内容の歌のようだ。

「俺たちの若い頃は、まだのんびりしてたけど、最近は早いうちから即戦力だからな」

「あなたは、わるい人ね」

意外にムードたっぷりな、いや、まあ……、いいか。

ところで、エプロン姿の理沙を想像してみようとして、うまく映像が浮かばない。色とりどりの光が散乱するカラオケルームで、音響効果のどぎつい中だからなのか。

いや、たぶん僕の知っているどんな場所を思い浮かべてみても、なんだかさぐわない。たしか前の転勤のときも、その前のときも、次の場所ではどうなんだろうと期待して、でもいつも、別に何かが変わったわけではなかった。

(続く)